読書推進運動

公益社団法人
読書推進運動協議会
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-32
出版クラブビル6階
TEL　03(5244)5270
FAX　03(5244)5271
発行人　小塚　昌弘
編集人　片岡　伸子

No.650

★「第66回 学校読書調査」について（5頁）
★2022こどもの読書週間・読書週間 標語決定（8頁）

定価60円　会員の購読料は会費の中に含まれる

年頭所感

本と向きあい、人と向きあう一年に

公益社団法人 読書推進運動協議会 会長
株式会社 講談社 代表取締役社長
野間省伸（のまよしのぶ）

あけましておめでとうございます。

全国の読書推進運動は、おかげさまで再開の動きが活発になっています。読書推進運動協議会が主催する、春の「こどもの読書週間」におきましても、行事主催者数がほぼ例年並みに回復いたしました（2020年は行事主催者数が820件、2021年は1700件）。

秋の読書週間の行事主催者数は集計中ですが、こちらも回復する見通しとなっております。関係者のみなさまのご努力、ご協力にあらためて感謝申しあげます。

新型コロナの世界的蔓延は「読書」にも大きな影響を与えました。電子書籍の売り上げが伸長し、公共図書館においても電子図書導入館が増加しているそうです（2020年4月では91館、21年11月には507館に増加）。

こうした現象をどう捉えるべきか。私は、紙とデジタルを対立的にとらえるのではなく、読書を進める「車の両輪」として理解すべきだろうと考えています。

たとえば動画共有アプリのTikTokで紹介された本が爆発的に売れたというニュースもありました。そのため「特設コーナー」を設置した書店もあるとか。

また学校教育においても文部科学省の政策で児童生徒は従来の紙の教材に加え、デジタル教科書などのコンテンツも活用して学習することになりました。

紙の本であれ、デジタル版であれ、子どもたちには基本的な読解力を培ってほしいと願っています。

特に子どもの読書では、「モノ」としての本の存在感が重要だと感じています。0歳児に絵本をプレゼントすることで、地域から子育て支援のメッセージを送る「ブックスタート」は、コロナ下でも各地で実施されました。

乳児はことばがわからずとも、絵本を通して自分にかけられる声とまなざしを感じ取り、絵本をさわって認識します。「しかけ絵本」などは、幼いお子さんが自分で操作して楽しむことができます。

小さいころから本が身近にあり、折りにふれて読み進めていくことができるような環境が、健やかな成長を促すといえましょう。

そして読書推進運動の最前線に立つのは、やはり「人」です。読者と直接向きあい、読書のおもしろさを伝えていく役割はますます重要になっています。

全国の公共図書館、学校図書館、家庭文庫、読書グループ、書店などと協力しあい、本に親しめる場所を増やしていきたいと思います。「読書週間」「こどもの読書週間」などの行事もいっそう充実させていきましょう。また、毎年私どもがお送りしている「若い人に贈る読書のすすめ」「敬老の日読書のすすめ」リーフレットのいっそうの活用もお願いしたいと思います。

読書推進運動協議会は、これからも「野間読書推進賞」や「全国優良読書グループ表彰」を通じて、読書推進運動に携わる方々を応援してまいります。

今年も読書推進運動協議会へのみなさまのご理解とご支援をお願い申しあげまして、新年のご挨拶といたします。

■公益社団法人 読書推進運動協議会　全体事業委員会

ポスター、リーフレットともに 全国から多数の希望をいただく

2021年12月6日㈪、東京都千代田区の出版クラブビルで、公益社団法人 読書推進運動協議会の事業である、2022年度春の「第64回 こどもの読書週間」および秋の「第76回 読書週間」の標語選定事業委員会が開かれた。

今回も感染症対策と議事進行の効率化を図るため、標語選定は事前に3次投票までを済ませ、当日は3次投票の集計結果をもとに4次投票、決選投票を行った。

その結果、あわせて1400点近くの応募作の中から、それぞれ入選作が決定した（詳しくは別掲記事を参照）。

続いて行われた2021年度全体事業委員会では、2021年度の事業報告、2022年度の事業委員会日程、その他の議題について、事務局から報告と説明が行われた。

4月23日～5月12日に行われた「第63回 こどもの読書週間」の標語は「いっしょに よもう、いっぱい よもう」。ポスターは毎回好評をいただいている荒井良二さんのイラスト、杉浦康平さんのデザインで制作し、6万部を配布した。10月には「行事報告」を刊行。今年の行事主催者数は、新型コロナウイルス感染症の影響により820件に減少した昨年から、1700件とほぼ平年なみに回復した。

10月27日～11月9日に行われた「第75回 読書週間」の標語は「最後の頁を閉じた 違う私がいた」。ポスターは5万7500部を印刷、配布した。こちらの行事報告は、来年4月の機関紙別冊で紹介する。また期間中、各道府県読書推進運動協議会に行事補助金を贈呈。各読進協からの推薦に基づいた「全国優良読書グループ表彰」では33団体に賞状・副賞を贈呈した。

「第51回 野間読書推進賞」は8月26日に第一次選考事業委員会を、9月14日に本選考会を、いずれもWeb会議で行った。11月6日に贈呈式を開催し、本賞2団体、2個人、奨励賞1団体を顕彰した。

「敬老の日読書のすすめ」リーフレットは14万3000部を印刷した。今年も感染症対策のため「書目選定事業委員会」に替えて、メールによる投票・集計ののち、委員全員で確認を行って選定した。

「若い人に贈る読書のすすめ」リーフレットも同様の手順で11月1日に書目を決定し、20万8000部を印刷、2021年内の申し込み分は「成人の日」に間にあうよう、配布した。

2021年度の「読書週間」「こどもの読書週間」ポスターとリーフレット2種

■全国図書館大会　山梨大会

チャット機能、交流サイトで 意見、実践を交換

2021年11月11日㈭、12日㈮を中心に、「第107回 全国図書館大会 山梨大会『知をつなぐ、甲斐（交ひ）の国から』」（主催＝同実行委員会）が、オンライン開催された。

オンライン開催のため、大会の参加者サイトでは、全16分科会の発表や資料を、11月初旬より配信した（参加者は2021年12月31日まで視聴可能）。11日、12日には、各分科会の意見交換やシンポジウムなどのライブ配信も行われた。

11日より配信された全体会では、同大会副会長で日本図書館協会理事長 植松貞夫さんが、この1年の図書館界の動きについて基調報告。感染症対策をとったうえでの図書館運営やその影響を紹介し、国に対しては、コロナ禍における図書館充実への提言や新年度予算での公共図書館・学校図書館の充実への要請を行っていると報告した。

全体会の記念講演は、山梨県立図書館館長の金田一秀穂さんと、集英社会長の堀内丸恵さんの対談「これからの出版と図書館」。金田一さんが堀内さんに、故郷・山梨での思い出や編集者時代のエピソードなどを聞く形で進行した。「出版社として図書館に望むことは」との問いに堀内さんは「出版社と図書館は、読書の機会を提供するという同じ目的を持つ、ともに連携してやっていける仲間。大きな屋根のある広場である図書館に足を運んでもらい、本にふれてほしい」と図書館への期待を述べた。

大会参加者サイトには、テーマごとのチャットルームで大会参加者同士で自由にメッセージのやりとりができる「交流サイト」が設置された（2021年12月31日まで）。大会プログラムの16分科会に加え、「山梨の市町村立図書館・学校図書館を考える」「図書館ボランティア」「うちの図書館自慢グランプリ」「観光ガイドにない―山梨ここがおすすめ―」など、全32テーマが用意され、参加者の交流を深める機会となった。

来年の全国図書館大会は群馬県でオンライン開催の予定。

■松岡享子さんが文化功労者に

子どもの本、読書活動への尽力が「文化の発展の功績」と認められる

公益財団法人 東京子ども図書館の名誉理事長で、児童文学者の松岡享子さんが、「200作を超える児童書を手掛け、学校や図書館での語りや読み聞かせ活動にも尽力」したことを事由に、令和3年度（2021年度）の文化功労者に選ばれた。

文化功労者は、「わが国の文化の発展に関し、特に功績が顕著な方々を顕彰するもの」として昭和26年（1951年）に制定され、今年は松岡さんを含めて21人が選ばれた。松岡さんの実践に敬意をあらためて表し、子どもの本、読書活動が「国の文化の発展への功績」として高く評価されたことが、志を同じく全国で活動している個人・団体・施設へのエールとなり、また、今後、公的な読書環境を整備する必要性をあらためて行政に要請する理由として運動を後押しすることにつながると、期待する。

東京子ども図書館のホームページに掲載されている松岡さんからのメッセージ「文化功労者に選ばれて」には、子どもの文学と読書への思い、次世代が思いを受け継いでいくことへの願いと希望が記されている。

●東京子ども図書館ホームページ
https://www.tcl.or.jp/

松岡享子さん（提供：東京子ども図書館

■JBBY おすすめブックリスト

キーワード検索にも対応した子どもの本データベース

一般社団法人 日本国際児童図書評議会（JBBY）は、同会が2019年度以降に発行したブックリストに掲載した図書を紹介するデータベース「JBBYがすすめる子どもの本」を、ホームページで公開している。

対象とするブックリストは『IBBYオナーリスト』『IBBYバリアフリー図書』『Japanese children's Books』『おすすめ！世界の〈子どもの本〉』『おすすめ！日本の〈子どもの本〉』『日中韓協同プロジェクト』の6つ。各推薦図書の書影、書誌情報、内容紹介、推薦ポイントが確認できる。

ブックリスト名、書籍タイトル、著者名だけではなく、「音楽」「スポーツ」「平和」など、キーワードでも検索できるようになっており、おはなし会や読書会、ブックトークのプログラムづくりにも活用できる。

データベースに収録のブックリストとバックナンバーの冊子は、JBBYより入手可能（有料）。入手方法など詳細は、JBBYまで。

●JBBYホームページ
https://jbby.org/
TEL　03－6273－7703
e-mail　info@jbby.org

上記QRコードより、現在入手可能なJBBY発行のブックガイドが確認できる

■日本子どもの本研究会 全国大会

コロナ禍での実践を検証しオンラインの長所短所の見極めを

一般社団法人 日本子どもの本研究会は、2021年11月6日(土)、7日(日)に、「第53回 日本子どもの本研究会全国大会『未来をひらく子どもと本―これまでのありかたを見つめ、新たな一歩を―』」、オンライン開催した。

基調報告は、同会会長の代田知子さんの「届けよう！本を読む楽しさを―コロナ禍の実践からみえた『本の力』と『大切にしたいこと』―」。埼玉県・三芳町立図書館館長である代田さんは、2020年2月27日の全国の学校への一斉休校要請、その後の緊急事態宣言などで図書館を休館したとき、ブックトーク動画の配信や予約資料の貸出を行ったが、子どもたちの反応はいまひとつであったと報告。図書館が再開すると、子どもたちがカウンターに群がり、「自分で本を探せる」とうれしそうに話したことなどを紹介し、「子どもたちは読みたい本が決まっていない。本にさわり、人と交流する中で本を選ぶ。オンライン授業など非接触サービスの広がりが、子どもの読書環境へどう影響するか心配」と語った。

記念講演は安田菜津紀さん（フォトジャーナリスト）の「今なぜ、子どもたちの姿を撮り伝えるのか 紛争、災害の現場から」。シリアや東日本大震災被災地の子どもたちの写真を紹介しながら、「子どもは社会の指標。社会のひずみは子どもたちに真っ先に現れる。それが子どもの表情を撮る理由です」と話した。

閉会講演は前沢明枝さん（翻訳家）の「異文化を超えて―物語を子どもたちに伝えるために―」。「翻訳は原作者の物語を私の物語にして子どもたちに渡すこと。そのため、作者が調べたであろうことを調べ、同じ世界で考える」「子どもがわかることばか、音だけで聞いてわかるか、考える」など、児童書の翻訳で特に工夫している点を紹介した。

基調報告、講演会、各種分科会はすべてライブ配信。Zoomのチャット機能を使っての質疑応答、意見交換も行われた。

■IICLOオンライン講座

教科書の名作をあらためて読み直して読書につなげる講座

一般社団法人 大阪国際児童文学振興財団（IICLO）は、2021年11月より、「IICLOオンライン講座『授業に役立つ！ 子どもの文学5つのレッスン』」（全5回）を配信している。

講座の目的は、小学校の国語教科書に掲載されている児童文学作品を読み直し、そこから発展した読書案内を行うことで、対象は教員だけではなく、司書・子どもの本に関心のある人となっている。

現在は、IICLO理事長で武蔵野大学名誉教授の宮川健郎さんが講師の第1回「宮沢賢治を読み直す①『注文の多い料理店』」が配信されている。このあと順次、第2回「宮沢賢治を読み直す②『雪渡り』」（講師＝遠藤純さん〈IICLO特別専門員、武庫川女子大学准教授〉）、第3回「あまんきみこを読み直す①『白いぼうし』と『名前を見てちょうだい』」（講師＝宮川健郎さん）、第4回『あまんきみこを読み直す②『ちいちゃんのかげおくり』」（講師＝土居安子さん〈IICLO総括専門員〉）、第5回「特別編 あまんきみこを読み直す③ あまんきみこさんに聞く読むことの喜び」（特別ゲスト＝あまんきみこさん〈童話作家〉）が配信される。

視聴料は各回1300円。配信期間は、公開から2022年8月31日までとなっており、期間内は何度でも視聴可能。講座の詳細と申し込み方法は、IICLOホームページで確認できる。

●IICLOホームページ
http://www.iiclo.or.jp/

【左】特別ゲストのあまんきみこさん
【右】『注文の多い料理店』復刻版表紙（IICLO所蔵）

■NPOブックスタート 講演会

公民協働のあり方を考える講演会

NPOブックスタートは、2022年2月5日㈯に、「子ども・社会を考えるシリーズ 講演会『つながりあう力〜公民協働で社会をつくる〜』」を開催する。

この講演会では、赤ちゃん・子どもたちをテーマに、毎年さまざまな分野の専門家を講師として継続して開かれている。今回の講師は、元厚生労働省事務次官で津田塾大学客員教授の村木厚子さん。

国家公務員として、女性や障がい者の社会進出を支える制度づくりに尽力し、退官後の現在も行政と民間という立場を超えて一人ひとりの「市民」がつながりあい、さまざまな困難を抱える人に寄りそう「伴走型支援」の構築に取り組む村木さんの実践は、公共図書館・学校図書館充実を進めるうえでのヒントとして期待できる。

講演は、Zoomによるライブ配信で開催。参加費は無料だが、事前の参加申し込みが必要。申し込み締め切りは2月1日13時となっている。ライブ配信終了後には、NPOブックスタートのYouTubeチャンネルで見逃し配信される（2月28日13時まで）。

⇦講演会申し込みのQRコード

見逃し配信用の⇨QRコード

■「図書館を使った調べる学習コンクール」結果発表

身近な疑問、将来の夢、災害対策などを図書館で調べる

第25回「図書館を使った調べる学習コンクール（主催＝公益財団法人図書館振興財団）」の審査結果が発表された。10万6千を越える応募作品の中から、入賞29作品3団体ほか入選作品が選ばれた。

文部科学大臣賞の受賞者は以下のとおり。◇小学生の部（低学年）／東京都墨田区立錦糸小学校1年・長沼奏汰さん「しりたい！ うんこのなぞ」◇小学生の部（中学年）／千葉県柏市立柏第六小学校3年・東條里桜さん「わたしのこせいについて調べてみた！ はったつしょうがいの「ナゾ」にせまる!! びょう気？ それとも…」◇小学生の部（高学年）／東京都墨田区立小梅小学校5年・小森日菜子さん「ヤマイヌ〜私が解明したい謎のニホンオオカミ〜」◇中学生の部／千葉県袖ケ浦市立昭和中学校2年・倉持よつばさん「嫁取り噺「桃太郎」〜全国の伝承昔話「桃太郎」を読み比べる〜」◇高校生の部／早稲田実業学校高等部3年・矢嶋諒さん「治水と景観問題から、今後の災害を考える〜二子玉川地区を事例として〜」◇大人の部／東京都・広瀬美智子さん「『市民』と『小民』―高輪築堤通船口―」

審査結果の詳細は同財団ホームページに掲載されている。

コンクール作品募集ポスター

●図書館振興財団ホームページ　https://www.toshokan.or.jp/winner-2021/

■第66回　学校読書調査

「おうち時間」の増加で「不読率」が低下？
コロナ禍のなかでの読書調査

子どもの読書の「定点観測」

公益社団法人　全国学校図書館協議会（全国ＳＬＡ）は、毎日新聞社と共同で毎年実施している「学校読書調査」の第66回となる２０２１年度調査のまとめを発表しました。

この調査は、児童生徒の読書状況に関する調査として、１９５４年から始まりました。毎年、６月第１週・２週に全国の小学生（４～６年生）・中学生・高校生を対象に調査してきましたが、２０２０年度は新型コロナウイルス感染症による全国一斉休校のため、残念ながら中止しています。今回の調査項目は、①５月１か月間に読んだ本の冊数、②５月１か月間に読んだ雑誌の冊数、③読みたい本を選ぶときの基準としているもの、④学校の授業で資料を使って学習したことがあるか、どんな資料を使ったか、⑤スマホやタブレットで電子書籍を読んだことがあるか、⑥いまの学年になってから読んだ本のタイトル（３つまで）。本についての項目はいずれも、教科書・学習参考書・マンガ・雑誌をのぞいて回答してもらっています。

「不読率」の推移

この調査でもっとも話題になるのは、①５月１か月間に読んだ本の冊数でしょう。読んだ本の冊数よりも、「１冊も読まなかった」と答えた子どもの割合、いわゆる「不読率」が、毎年、多くの関心を集めています。今回は前回（２０１９年度）と比べ、小学生は６・８％→５・５％、中学生は１２・５％→１０・１％、高校生は５５・３％→４９・８％と、すべての層で不読率が低下しました。高い数値が続いていた高校生の不読率が５０％を切ったのは、２０１４年以来です。図「過去31年分の不読者（０冊回答者）の推移」をご覧ください。

全国ＳＬＡでは、今回、全体で不読率が低下したのは、学校図書館に関わる人たちの工夫と努力もあるのではと、推察しています。同会が昨年度行ったアンケートでは、一斉休校中に「読書」を課題とする学校が多かったこと、児童生徒に向けて推薦図書リストや情報を提供した学校が一定数あったことなどがわかっています。

また、外出しにくい状況で、「本を読むしかない」という子どもたちも多かったと思われます。感染症の拡大が収まりつつある来年度以降も、不読率が低下することを願います。

本を選ぶ決め手はなに？

読みたい本を選ぶ基準として全国ＳＬＡは「表紙・本の題名・活字の大きさ・本の大きさや重さ・本の値段・友だちのすすめ・家族のすすめ・先生のすすめ・世の中の人気や評判・新聞や雑誌の広告・好きな作家・映画やテレビの原作」の12の選択肢を用意し、子どもたちに３つまで選んでもらっています。

結果、すべての層で高い割合を示したのが「本の題名」。次いで「表紙」が多く、子どもたちは世間の評判や映像化などの話題性よりも、自分で見て、手に取って、自分の感性で本を選んでいるようです。

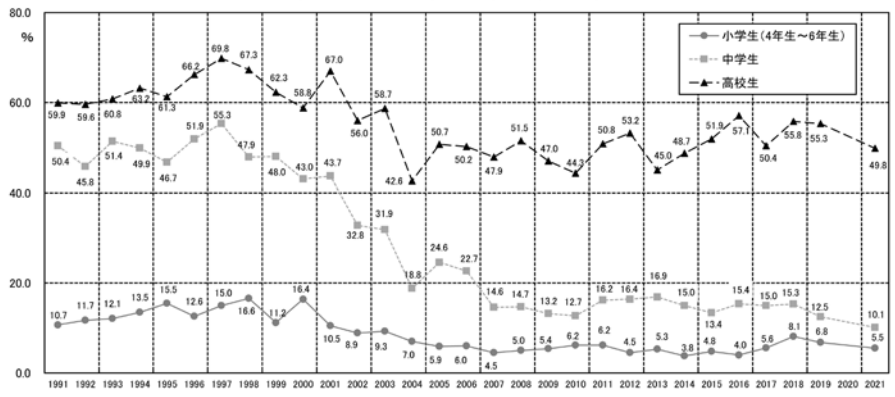
「家族のすすめ」は５～13％、「先生のすすめ」は０・８～４・１％と低い割合ですが、「友だちのすすめ」になると18・１～28・５％と高くなります。友だちとは本の話をするけれど、大人とはなかなかしないものなのでしょうか？大人がもっと、子どもと本について語りあう機会と時間を持てば、もっと高い割合を示すように思います。

また、学年が上がるにつれ、「世の中の人気」「新聞などの広告」の割合が増えるという結果も出ています。全国ＳＬＡでは、「時間を無駄にしたくない」という気持ちから「当たり」の可能性が高い本を求めているからではないか、と分析しています。効率化の影響はこんなところにまで、およんでいるようで、複雑な気持ちです。

すべての調査項目の結果、詳細な分析が掲載されている、『学校図書館』２０２１年11月号は、書店での注文、または全国ＳＬＡへの直接注文で購入可能です。（編集部）

●全国ＳＬＡホームページ
https://www.j-sla.or.jp/

図　過去31年分の不読者（0冊回答者）の推移



●図の出典：学校読書調査（毎日新聞社、全国学校図書館協議会）

優良読書グループの歩み　(1)

2021年度の「読書週間」に際して道府県読書推進運動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。　(順不同)

リオンの会

代表者　赤松しづ代
青森県八戸市
〈推薦〉
青森県読書推進運動協議会

リオンの会は、老健施設での読み聞かせ会・親子読み聞かせ会・朗読会などの活動を行っています。2016年4月に老健施設から「読み聞かせをお願いしたい」とお声をいただき、音訳ボランティアの仲間4人とともに始めました。現在は2か所の施設を7人で訪問しています。

施設を利用されている方々は、人生の先輩でもある方々です。どういう選書をしたらいいか、とみんなで楽しく悩みました。幼いころに聞いて、ご自身も幼かった子どもに読み聞かせされたであろう昔話、地元の方言での昔話「南部むかしっこ」も好評でした。大人の絵本や青春のころに流行ったドラマの紙芝居、落語の絵本など。

楽しい話は笑い、悲しい話には涙を浮かべて聴いてくださる姿に、読み手も声が震えてしまいます。「今日も楽しみにしていましたよ」と待っていてくださり、会の最後は入所者の方々と一緒に、オカリナの演奏で「ふるさと」の大合唱です。帰りには「楽しかったよ、また来てね」と、声をかけていただき幸せな活動でした。

読み聞かせ会は、孤独になりがちな若いお母さま方にエールを込めて、子育てが楽になる絵本を紹介しようと始まりました。片づけが楽しくできる『かたづけしないとどうなるの』など、いろいろな悩みを楽しく解決してくれる絵本がたくさんあり、絵本の力はすごいなと、あらためて感じています。孫育ての方々には、昔話のよさを紹介したいと考えています。

コロナで休止の読み聞かせ会の再開に向け、しっかり充電！

年に2回の朗読会は、七夕とクリスマスの時期に行っています。

いまはコロナ禍でお休みしておりますが、たくさんの本を読んで引き出しを増やしておく時期だと思っています。そして、これからも、活動の場をくださった方々や楽しみに聴いてくださる方々への感謝の気持ちを忘れずに、施設での活動、読み聞かせ、朗読会など続けていきたいと思っています。

みちくさ

代表者　山田　妙子
富山県小矢部市
〈推薦〉
富山県読書推進運動協議会

小矢部市民図書館は昨年（2020年）春3月、小矢部市城山から小矢部市石動町のあいの風鉄道石動駅に合築の形で新築移転しましたが、コロナ禍ですぐに休館となってしまい、みちくさ読書会も2回、休会しました。いま（2021年秋）、再びのコロナ禍での休館休会の目にあっています、と宮澤賢治風に言いたいところです、おおげさではなく。

楽しい「みちくさ」のような読書会をこれからも

「みちくさ」は第3土曜日午前10時からの月1回の読書会です。小矢部市立石動図書館を拠点に発足しました。図書館は、2003年から小矢部市民図書館と改称され、移転のおりには「創立90周年記念誌」が発行されました。

この記念誌には、図書館長やおとぎの館室長、司書、絵本講師が想い出を綴っていて、読書会「みちくさ」代表として私の随想も掲載されています。タイトルは「みちくさ読書会の前史」です。35年ほど前、猛々しい「一般読書会」に所属していたのです。が、2年ほどで退会、1989年に「みちくさ」読書会が発足し、私は1993年に入会しました。そのころ、この会を「みちくさ」と名づけた会員たちがつぎつぎ小矢部を離れました。小矢部での読書で、深い心豊かな「みちくさ」をされていたように感じ入ります。その後、3人となった「みちくさ」は氷見へ合同読書会に出かけたり、県連の県外研修に参加したり、読みなかまのつどい、さらに市内合同読書会の運営なども重ねてきました。移動距離も長く、なんと多くの本にふれ、多くの方と顔をあわせたことでしょうか。

6年前、納会となった読書会と合併し、新人も迎え、現在の会員は7人。会員の環境は多彩です。画家になった、書店経営、接骨院経営で多忙、読み聞かせボランティアになった、他組織での事務局の立場が多忙、孫10人になった、など。その環境のもと、文学や芸術の本との出合いを喜びに読書会は続きます。市報掲載に備えて早めにテキストを選ぶため、目録か

ら選書しても入手できず、テキストを購入して回し読みすることもままあります。それもこれも、人生経験、社会的立場の違う会員で読書感想、人生体験談など感想を語り聞くことが読書会のよろこびであり、また楽しいみちくさでもあることです。

人形劇サークル「明夢」

代表者　春原　夏江
長野県中野市
〈推薦〉
長野県読書推進運動協議会

人形とたどった半世紀―

スポットライトが当たり、舞台より人形が現れる。「お～!」との声が聞こえる。

これから始まる物語の冒険、そしてエンディング曲が流れ、演じた人形を持って舞台裏より観客の前に立つ瞬間、なんともことばに表せない至福の世界。

私たちメンバー4人は何回、この至福の時間を過ごしただろうか。

思い出せば30数年前、私の娘がピアノの練習に通っていた先生が保育士で、「人形劇を自分たちで演じれば見ているより楽しいよ」とのことばに誘発され、未知の世界に足を踏み入れました。

舞台も人形作りもはじめてのこと、幸いにも私の義父が大工だったので、知恵を借りて、木で舞台袖を製作してもらいました。木製なのでだいぶ傾いていますが、いまでも重宝に使っています。

そのつぎに問題になったのは練習場所の確保。いろいろな人の知恵を借り、図書館にたどりつきました。そのころはメンバーも子育ての真っ最中だったので、オムツ持参で練習に。少し大きくなると子どもたちにも手伝ってもらい、一緒に舞台を作りあげました。いまではその子どもたちもすっかり大人になりました。数年経ったころ、いまの新しい図書館に引っ越してきました。そのころの館長先生がいろいろな面で携わってくれ、倉庫まで提供してくれました。私たちはどのくらい恩恵にあずかったわかりません。

ピアノの先生も、義父も、館長も、いまはこの世から去り、メンバーも何十人も入れ替わりました。思い出のページです。

始めたころは、一字一句間違えないようにとそのことばかりで、自分がなにをしているのさえわからず、苦痛に思ったこともありました。半世紀も人形たちと一緒に過ごしていると、人形が擬人化し、操っている人が乗り移るような感覚に陥ります。いまは半分アドリブで演じ楽しんでいます。

私たちメンバーも人形とともに年を取り、若いころのように大きな人形を操ることも間々ならなくなり、少し動くと体が悲鳴をあげます。

考えるといろいろな人の応援のもと、いまの私たちがあります。雲の上から見守ってくれている人たちにも背中を押され、いま自分たちのできる範囲で「明夢」の名前のように見ている人に、明るく夢を届け続けていきたいと思います。

特定非営利活動法人 つわの花

代表者　宮崎　正子
熊本県天草市
〈推薦〉
熊本県読書推進運動協議会

退職しても子どもたちに関わりたい、本の読み聞かせやおはなし会などを行いたいという思いを温めていた元保育士が、2002年に仲間を誘ってふたりで始めた読み聞かせが活動のスタートです。現在14人で活動しています。

私たちは「子どもたちの読書の心を育て、人の優しさ、優しい心を声に乗せて届ける」ことをモットーに、読み聞かせを行っています。

毎週小中学校に出向いて行う読み聞かせはもちろん、児童館「つわの花」に子どもたちが集まる「学童保育」や「放課後子ども教室」でも、読み聞かせや、読書の活動を大切にしています。また年1回、5月の連休期間に町の図書室で行う「おはなし会」は、地域の子どもたち、里帰りのご家族などに喜んでもらっています。昨年は10回目の節目と会員も楽しみにしておりましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、そして今年も中止を余儀なくされ、残念に思っています。

「つわの花」で週3回開かれる「子育てサークル」では、ブックスタートを行っています。赤ちゃんとお母さんが一緒に読み聞かせを聞いたり、お母さんが読み手になるなど、さまざまな形で絵本にふれる機会を用意し、親子で絵本の楽しさにふれてもらっています。

子どもたちへの読み聞かせの活動を続けるなかで、読書は、子どもたちの生きる力を育む、という思いを強くするとともに、大人にとっての読書の大切さも意識するようになってきました。「つわの花」は、高齢者が集ういきいきサロンも開いており、お年寄りに昔話や絵本にふれてもらう機会も取り入れているところです。

今後は、高齢者施設などへの定期的な読み聞かせを行っていきたいと考えています。お年寄りから子どもたち、子どもたちからお年寄りへと双方向の読み聞かせも取り入れてみたいと思います。また、大人にもっと絵本を楽しんでほしいと考えており、大人が絵本を読む機会をつくっていきたいと思っています。地域で読書に取り組む、「読み聞かせの町有明」に向けて、取り組んでいきたいと思います。

赤ちゃんから高齢者までさまざまな年齢層が対象

標語決定！

2022 第64回
「こどもの読書週間」
ひとみキラキラ　本にどきどき

2022 第76回
「読書週間」
この一冊に、ありがとう

2021年12月6日(月)、公益社団法人 読書推進運動協議会の「こどもの読書週間」および「読書週間」標語選定事業委員会（出席20名）が開催され、「2022 第64回 こどもの読書週間」と「2022 第76回 読書週間」の標語が決定しました。

第64回「こどもの読書週間」標語の応募総数は一般・会員各社あわせて652点（選考対象は445点）。第76回「読書週間」標語の応募総数は742点（選考対象は476点）でした。

選定委員会では「こどもの読書週間」標語、「読書週間」標語の順で協議。どちらも、事業委員による数回の投票（第3回投票まではメールで集計）で作品を絞り、推薦の弁などを加えて、最終的に各委員の一票投票によって、入選作品を決定しました。

ご応募されたみなさん、社内の応募作をとりまとめいただいた会員各社の担当者のみなさん、ありがとうございました。

【第64回 こどもの読書週間 標語】

■入選（図書カード1万円）1点

・ひとみキラキラ　本にどきどき
後藤千鶴子さん（小学館）

■次点（図書カード5千円）2点

・さがしものは、本のなかに
日下部由佳さん（講談社）
・もっと知りたい もっと読みたい
木梨　佳典さん（日販）

■佳作（図書カード2千円）20点

・今の君に読んで欲しい
・宝物はここで見つけた。
・わたしのなかに、
100人ぶんのものがたり。
・パパもママも読んでたあの本
・さあ、ぼうけんのはじまりだ
・主人公は君だ！
ほか

【第76回 読書週間 標語】

■入選（図書カード1万円）1点

・この一冊に、ありがとう
天野　耕平さん（講談社）

■次点（図書カード5千円）2点

・あたらしい本　あたらしい発見
あたらしい自分
福島　真実さん（小学館）
・もっと、きっと、ずっと読書
岩本　幸子さん（日販）

■佳作（図書カード2千円）19点

・人は読む生き物なんだ
・自分の推し本　見つけよう!!
・あれも読みたい。これも読みたい。
全部読みたい。
・活字の杜で会いましょう。
・スマホを置いて本を持て。
ほか

事務局報告（12月）

・2日＝「造本装幀コンクール実行委員会」に出席
☆6日＝「2021年度 全体事業委員会」および「第64回こどもの読書週間 標語選定事業委員会」「第76回読書週間 標語選定事業委員会」開催
☆7日＝機関紙『読書推進運動』649号入稿
☆8日＝機関紙『読書推進運動』649号責了
・8日＝「学校図書館図書等の整備・拡充を求める各界連絡会」に出席
・9日＝とよたかずひこさんと「子ども読書の日」ポスター打ちあわせ
☆10日＝内閣府による立入検査実施
・11日＝JBBYオンラインセミナー「本来の『学び』とは何か～デジタル化が進む学校現場から子どもたちの未来を考える」参加
・13日＝「第25回 図書館を使った調べる学習コンクール」三次本審査を実施
☆14日＝「第64回 こどもの読書週間」ポスターデザインを杉浦康平事務所に依頼
・14日＝「上野の森 親子ブックフェスタ運営委員会」に出席
☆15日＝機関紙『読書推進運動』649号出来
・15日＝「文化産業信用組合総代会」に出席（オンライン）
・16日＝とよたかずひこさんと「子ども読書の日」ポスター打ちあわせ
・20日＝伊藤忠記念財団と「子ども文庫助成事業」について打ちあわせ
☆21日＝年賀状発送
・23日＝「上野の森 親子ブックフェスタ2022」開催概要、開催方針を、運営委員会より子どもの読書推進会議・野間省伸代表に報告
・24日＝「第25回 図書館を使った調べる学習コンクール」最終審査会に出席（オンライン）
・27日＝「上野の森 親子ブックフェスタ運営委員会」に出席

●編集部&事務局のひ・と・こ・と

●新年あけましておめでとうございます。

●コロナに振りまわされ早2年、高校勤務の夫の話では、学校の一斉休校や各種行事の中止の影響が、少しずつ露わになってきたようです。

●曰く、2020年4月の入学者には、学校での生活習慣やふるまいが身についていない子がいつになく多いようだ。「2021年入学組もその傾向はあるが、まだいい方。2020年組の担任だったら、かなり苦労したと思う。高校でこれなら、小学校はもっと苦労しているだろう」「この2年で、全体の学力は落ちているんじゃないかな。対面の授業だと、わからなくても指名されるかもという緊張感でなんとかついていこうとするけれど、オンラインだと緊張感がないから、わからないとそのままにしている感じ」

●「日本子どもの本研究会 全国大会」の基調報告で代田知子さんは、図書館休館中に取り組んだブックトーク動画配信が思ったより子どもたちに届かなかったことを踏まえ、「子どもは五感で本を選ぶ」と実感したと語っています。行政側はGIGAスクール構想や電子図書館に多くの予算を用意してオンライン化を進めるようですが、子どもを育む現場で求められているのは対面での学びであり、仲間とのさまざまな体験のように思えます。

●2020年に中学生になった甥の手紙にはひとこと「オンライン授業はショボい（笑）」。今度会ったらどうショボいのか、要確認です。（伸）